
NPO 法人市民福祉団体全国協議会・復興支援事務所
NO.3 (2012年6月1日発行)

メルマガ しっかい！

歩もう	つながろう
支えよう	広げよう
学ぼう	増やそう

★被災地関連情報★ 問い合わせは連絡先へ直接行ってください。

【中古ミシン提供募集】 山元町仮設の女性グループ支援
連絡先[ささえ愛山元・中村怜子 080-3031-5722]

【就労支援】 たすけあい佐賀緊急雇用募集！
被災地の方、佐賀市で2名就労受け入れます。
研修を受けながら給与支給
連絡先[山田健一郎 0952-23-6950]

前回に引き続き募集中です！

【おもかげ雛(記事参照)】 希望の方は連絡下さい！
連絡先[安部白道 080-1885-8932]

【新任自己紹介】

この度、SHOP事業に着任しました宍戸（ししど）です。
沢山の被災者と出会い、いろんな話を聴く機会が増え大変ながらもやりがいを感じております。故郷宮城に少しでも恩返しが出来れば思いながらこの取り組みに従事してまいります。

【宍戸昭広】

宮城県東松島市（旧鳴瀬町）出身 37歳独身

就職を期に上京。ものづくり8年オフィスワーク10年経験、東京中心に関東近郊に在住し、仕事で約1年海外生活を経験。

昨年GWに地元で災害ボランティアに参加し、現場先のすみちゃんの家で伊藤さんと知り合ったのが市民協とのきっかけです

趣味：音楽鑑賞（ロック中心最近はクラシックにも関心あり）

ジョギング（東京マラソンを走った事もあります！）

乗馬（震災でクラブの馬が全滅。非常に辛かったです）

【雑二題】

(安部 白道)

- ★「ショップ（宮城県新しい公共）事業」の説明のため、仙台市内の仮設グループや自治会関係者を順次訪問している。ほとんどの仮設で、女性グループによる小物制作が始まっている。その中にはけっこう“大物”も・・・そのひとつが「つるし雛」。集会所に飾られているそれらを見ると微妙な違いに気づく。ある女性「つるしびなは、49個作らなくてはならないのでけっこう大変なんです」。49の意味を尋ねると「1本に7つの雛をつるし、それを7本まとめてひとつのつるし雛にするから合計49。四十九日に関係するからかもね？」
- ★ 別の仮設では、5本で作られていたことを思い出し、調べてみたところ、つるし雛のルーツはどうやら3つあるようです。
『7本ルーツは、福岡県・柳川市の“さげもん”。5本ルーツは、静岡県・稲取の“雛つるし飾り”。これは11個つるした赤糸を5本。それを対で飾るのが正式のようです。3つめは山形県・酒田の“笠福”で、これには合計61個の飾りがつくとのこと』
共通しているのは、どれも奇数個であること。縁起もののせいでしょうか。個数や糸の本数に違いがあるにせよ、この飾りを手掛けている仮設の女性たちの指先には、招福・復興の祈りが込められていることに違いはありません。
- ★ 写真は津波で愛娘を亡くされた岩手県大船渡市のご家族にお届けした“おもかげ雛”です。人形の街で有名な埼玉県・岩槻市の人形職人さんらの手になるもの。震災で家族を亡くされた方、ご遺体が行方不明で気持ちの整理がつかないご遺族から、故人の写真をお預かりし、それをもとに、故人に似せた顔のひな人形を創るのです。一体に1カ月かけて、職人さんは、祈りを込めて制作するのだと聞きます。
- ★ 今年3月、遺影の飾られた仏壇の前で、ご遺族にこの雛人形をお渡ししたことが今も鮮明に思い出されます。姉は「妹によく似ている」と小さく何度もうなずいていました。父親はその人形を抱いて襖の陰で嗚咽しておりました。母親は、お礼の言葉のあとこう付け加えました。「娘のひな人形制作をお願いしたものの、現物が届いてもそれを見る勇気がないだろう、と考えていました。でも、こうして届けていただいて娘が戻ってきたような気持ちになりました」
被災者の方で、ご希望がある場合は、安部までご一報ください。お取り次ぎいたします。もちろん無料です。



【いわて通信】

(古賀 久恵)

古賀@遠野です。

「単なるおしゃべりが人を救う！」実践編

岩手県内の某仮設で海外から日本に嫁いだ方とお友達になりました。実は他団体から「さびしそうにしている外国人女性がいるから時間があるときに来てほしい」と、非公式にオーダーを受けていたものでした。偶然ですが、別のルートからも「その家を訪ねて友達になってあげて」と、電話をもらっていました。

日曜日にその仮設を訪ねるとちょうどその方が集会所に向かって歩いてくるところでした。日本語は相当できる方でしたが、「英語で思いっきり話したかった」とのこと。こんなところにもお話し相手のニーズがあるんですね。2時間近くおしゃべりしました。いわゆるガールズトーク（女友達同士のたわいのないおしゃべり）でした。初めて会ったのに話題は尽きず、その方の高校時代のBFの話や日本にくることになったいきさつ、震災時の不安や震災に対する自分のスタンスなどなど、「家族には話せないこと」と言いながら、たくさん話してくれました。「単なるおしゃべりが人を救う！」は万国共通だと再認識しました。

「支援団体雇用事情」

3月末や4月末までで所属していた団体が撤退した、雇用契約が切れたなどなど被災地支援に関わっていた人たちの雇用状況に変化がでています。支援に関わってきた人たちは、せっかく出来た人とのつながりを継続したい、なんでもいいので被災地支援を続けて行きたいという意思を持っている人が多く、今後も支援を続ける別の団体に雇用されたりしています。

支援団体における雇用の傾向としては、被災各地に事務所を作り、地元の人を雇用し、一日も早いハンドオーバーを目指しています。また、もともと岩手にある中間支援NPOでは、各種補助金が取れたということもありますが近隣のNPOとして沿岸部の後方支援に徹しています。こちら事務局スタッフは現地の方を採用し、あくまでも地元の方のニーズがあつての活動である、こちらからサービスを押し付けるものではないというスタンスのようです。

その他、実績のあるNPOは被災地支援に関係する各種事業が採択されたのはいいのですが、人手不足で大変という嬉しい悩み。そういった団体も職員を募集中。そして、内閣府のインキュベーション事業の受講生（インターンシップ）の確保にいろいろな団体が動いています。青田刈り状態です。

現地の人手不足は遠野も同様で、私もこれまでデスクを無料でお借りしていたNPO法人遠野山・里・暮らしネットワークさんのコーディネーターとしてお手伝いするようになりました。

以上です。

【みやぎ通信】

(藤田 佐和子)

愛称「SHOP 事業」(第4次新しい公共の場づくりのためのモデル事業)が動き始めました。しかし、採択されたという通知が4月半ば過ぎに届いたものの、その後、県から何の連絡もなく戸惑っています。先日、所長が電話で質問等の問い合わせをしましたが、やはり明確な返答はなかったようです。とはいえ、1ヶ月遅れとなっている事業をこれ以上先延ばしにすることも出来ず、連休以降、所長と共に各仮設を廻って「SHOP 事業」の説明を始めました。

対象の仮設は10ヶ所。これまでに6ヶ所を廻りましたが、そこで気づいたのは、当初の“震災体験した人は皆同じ”という一体感から、今後に向けての自立意識の違いから個人差が出てきて、ひとりのまとまって行こうという勢いのようなものが感じられなくなっていました。今は、どこに居を定めるかが大きな関心事であり、家建てて出て行くと考えている人、元の場所に建てるかどうか迷っている人、復興公営住宅に住むと考えている人、そして弱者である高齢者というように、水面下でそれぞれの思いが揺れ動いているように思えました。

思いがバラバラな今だからこそ、ふれ愛や交流を促すパラソル喫茶は必要であるし、仮設内にグループをつくって活動していくチャレンジ型モデル事業が必要とも言えます。時間経過と共に変化していく各仮設ニーズに合わせ、これからも住民に寄り添いながら、きめ細やかで柔軟な対応を心がけていきたいと思っています。

6月初旬までにはモデル事業の説明を一巡し、その後関心を示している仮設と更に話し合い、下旬に開催する第2回ドリーム会議(仮設住民によるコミュニティ・カフェ等推進協議会会議)で、仙台市内2ヶ所、東松島市1ヶ所に絞り込む予定です。

モデル事業応募要件の一つに月1回の「会議体」を開催することとなっており、つい先日、全員出席の下、「第1回ドリーム会議」を開催しましたので簡単に報告いたします。会議体の構成メンバーは以下のとおりです。

◆◆第1回ドリーム会議◆◆

◇日時 2012年5月23日(水)10時~12時

◇場所 仙台市青年文化センター、会議室3

◇出席 ①仙台市市民協働推進課 1名
②(社団)パーソナルサポートセンター1名
③NPO法人おひさまくらぶ1名 ④NPO法人ナルク宮城 1名
⑤賢和会・男の台所サロン2名 ⑥さくら会 2名
⑦仙台傾聴の会 2名 ⑧パストラルケアPネット 1名
⑨茂庭台すずめの宿 2名 ⑩事務局 4名

◇内容 団体(自己)紹介の後、会議開催に至った趣旨説明、そして県に提出した資料を基にモデル事業の説明を行い、その後質疑応答。これまでの進捗状況を報告し、次回開催を6月第4週と決め、閉会しました。

連休後早々に、推薦を頂いた仙台市市民協働推進課と、仙台市から委託を受けて仮設の見守りや就労支援事業をしている PSC（パーソナルサポートセンター）には、所長ともども挨拶に伺い、モデル事業の説明をしておりました。しかし、パラソル喫茶チーム6団体の方々とじっくり話をする時間がとれず、やむなく口頭や文書で簡単に説明する程度でしたので、会議で改めて要点のみでしたが説明し、質疑応答やら意見交換したことで、同じスタートライン上に立ち、同じ方向を見て進む、第一歩を踏み出すことが出来ました。

2時間という限られた時間の中で進行していきますので、発言を控えた方もいらっしゃったようですが、その場に居て感じたことは、皆さんが『被災した方々のこれからの自立のために何かお手伝いしたい…』という、熱い思いで関わってくださっていることでした。

各団体には、カフェ用食材費として1回5千円、月1万円を上限に支援していますが、パラソル喫茶は交通費も活動費も出ないボランティア活動です。平均年齢はおそらく65歳くらいでしょうか？最高年齢は77歳？

私も含めて、シニアはまだまだ元気です。

【ふくしま通信】

（安部 白道）

★4月中旬、南相馬市の一部が立ち入り解除となり、避難していた住民には1年ぶりの帰宅となった。解除となった地域内に自宅がある友人が案内してくれることになり、原発から10kmの距離まで視察することができた。付近の公民館には常設型の線量計（写真参照）が設置され、デジタル表示で「1.5」の線量を告げている。それでもこのあたりでは低いほうだという。友人の自宅周辺は3～5マイクロシーベルト。

★そこかしこに震災直後の惨状がそのまま広がっていた。地震で倒壊した家屋が道路半分を塞ぐ。電柱は傾きフェンスは折れ曲がり傾いたまま。損傷のない家屋の敷地は雑草がはびころうとしている。金属部分には赤さびが浮き出ている。1年2カ月経過しても、これが福島の実況だ。

友人とその家族は、新築後半年も経たない自宅に戻り、暗澹たる思いで片づけをしたという。もちろんインフラ整備はできていないので住むことはできない。

★沿岸部の元住宅地は、広大な塩湖と化していた。地盤沈下の影響でまったく水が引かないからだ。そのあちこちに、車の残骸が放置されたまま。それはおどろおどろしい墓標のようでもある。海辺にある半壊の家では、都内ナンバーの大型バスが停まって、20名ほどのがれきボランティアが活動している。

★友人が務める特養ホームの施設長は、「津波被害を免れたものの、喫緊の課題は介護スタッフの慢性的な不足である」と訴える。生活や子供の教育基盤が確立できないため、スタッフは県内外に去っていくという。

「全国に介護ボランティアを呼びかけ、その方々が泊まれる宿舎を敷地内に建設することが決まった。しかし、放射能不安も根強いなか、はたしてそんなボランティアがどれほど来てくれるのか予想もできない」と嘆く。慢性的な不足は、医師や看護師も同様で

